



写真 60 堀 1・2・3 (東から)



写真 61 堀柱の礎石 (南から)

が認められた。これらの溝は、大書院の北側及び東側の雨落溝になるものであるが、大書院自体に建て替えによる時期差があったことが分かる。大書院の礎石そのものは確認されなかったが、礎石を据え付けていたと思われる浅い掘り込みは幾つか認められた。

調査区の北東側では、礫を充填した方形土壌が確認された。これは小書院東南角の雨落溝に相当するものと思われる。

#### 火災後の遺構

再建御殿の最も大きな特徴は、小書院が造られなかったことである。火災前の広間、大書院、小書院という構成は、広間、大書院の2棟構成へと簡略化され大きく変貌した。

調査区の南半分がほぼ大書院に相当する。しかし、火災前同様礎石の抜き取りを想定させる浅い掘り込みは認められるが、柱配置を特定することはできなかった。

火災前の「水溜メ」は、前述したように瓦が投げ込まれていたことに加えて、南半分が縁の下に位置していることから、火災以後は機能を失っていたことが分かる。

調査区の北東側には、土層の存在を証明する径1m前後の柱穴が東西方向に4つ並んで検出された(堀3)。

溝1の南側に幅50cm前後の浅い溝が数本平行して走っている。これは明治の取り壊し後、桑や麻畑になった時の畝の溝である。

#### T-5 (第43図、写真55・62～70)

広間と大書院の接続部分(金鷲之間)を確認するために設定した。

#### 火災前の遺構

調査区のはほぼ中央で、西側へ「コ」の字形に張り出した溝を2本検出した。両者共張り出しの南西コーナーは共有するが、溝1は北へ約3.2m、溝2は約6m行ったところで東に折れ、溝1は約7.6m、溝2は約5.2m行ったところでそれぞれ北に延びる。南側2.6mの範囲には溝の石組が残っていたが、他



写真62 全景（空中撮影）



写真63 全景（東から）

の場所は裏込めに用いられたと考えられる小礫が部分的に認められただけで明確な石組みはなかった。恐らく抜き取られたものと考えられる。

溝1はT-4の溝2、溝2はT-4の溝3に接続する。溝の新旧関係は、溝2が古く溝1が新しい。これらの溝は、南から広間、「金鷲之間」、大書院の雨落溝に相当するが、絵図との照合では溝1がこれに該当することになる。

溝1の御殿側に平行して浅い礎石抜き取り痕が認められた。これらの穴は、広間北東部の「縁側」、「金鷲之間」、大書院南東部「入側」の柱配置と一致する。

また、絵図には広間の北東隅から東に便所と塀が記載されている。塀の位置には、礎石をもつ柱穴が連続していたことからその存在が確認された（塀1）。そして、T-4の場合と同様2



写真64 火災前広間大書院接続部の雨落溝（東から）



写真65 火災前広間北側の礎石抜き取り痕（東から）



写真66 火災前広間北側の雨落溝（西から）



写真67 火災前広間東側の雨落溝（南から）



～3回の建て替えのあったことも確認された。便所については、該当箇所それぞれに相当する遺構は確認されなかった。

#### 火災後の遺構

西側へ「コ」の字形に張り出した溝の内部に、約1m間隔で4個の石が南北方向に直線に並んで検出された(礎石列1)。これは、再建御殿の「藤之間」と「桜之間」の東側、即ち「入側」の西側ラインの柱筋に当たることから、やや小ぶりではあるが礎石と考えると差し支えないと考えられる。

溝1の南東コーナーから東に約1m間隔で柱穴が並ぶ(堀2)。これも土塼になるものである。

#### 時期不明の遺構

調査区のはほぼ中央で東西約4m、南北約5.5m、深さ約1.7mを測る方形土塼(土塼1)を検出した。底面の東西両側には浅い掘り込みを施し、東に3箇所、西に2箇所礎石状の平らな石を配している。同じく東西両壁に沿って底面で幅50cm程度のスロープが南から取り付く。火災前の御殿雨落溝がこの遺構に重複することから、時期は御殿以前とせざるを得ない。性格は不明である。

調査区の西半部には直径2m、深さ1m強の土塼が3基(土塼2～4)検出された。このうち土塼2・3には底面の外周が1段深く掘り込まれており、ちょうど大きな桶状の物の設置を想定させられた。従って、桶を据えた便所の遺構ではないかと検討したが、絵図に記載がないこと、便所の桶にしては規模がやや大きいことなどから最終的に便所でないと判断した。現在のところ、機能は不明であると言わざるを得ない。

他に、T-5同様、畑の畝溝が平行して整然と並んでいた。



写真68 火災後礎石列1(北から)



写真69 土塼1(北から)



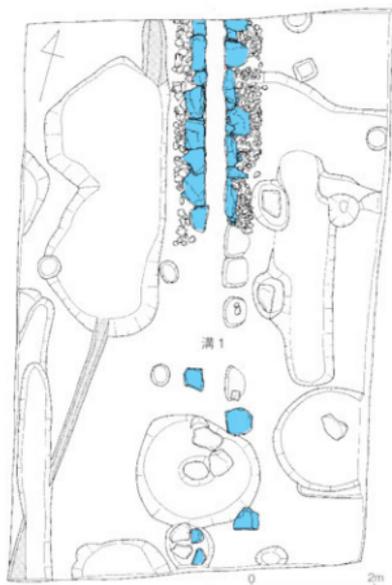
写真70 土塼2(西から)



写真71 全景 (空中撮影)

広間の東側を確認するために設定した。T-5溝1の石組溝が、そのまま南方向に延長していることが確認された(溝1)。火災前の広間東側の雨落溝にあたる。石組は調査区の北から3.5mにわたって遺存していただけである。本来の石組は、さらに南に延びていたことが石の抜き取り痕跡からも理解される。

他に土壇、柱穴がいくつか確認されたが、建物との関係は不明である。



第44図 T-6平面図 (S=1:80)

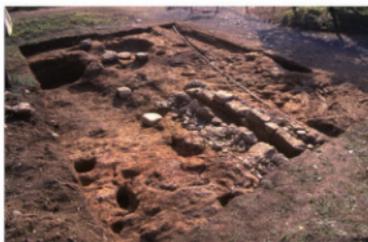


写真72 全景 (北東から)



写真73 溝1 (南から)

#### 出土遺物

水溜出土遺物 前述のとおり、水溜は、その内部のほとんどを瓦で充填されていた状態であった。それらの中から、軒平瓦を掲載しておく(写真74)。上四段は本瓦、下五段は棧瓦である。これらの瓦は文化6(1809)年の火災後に廃棄されたと考えられるので、軒平瓦の出土点数からは、文化6年段階で津山城本丸御殿に葺かれていた瓦の半数以上が棧瓦であったことが推測される。棧瓦の出現は享保



写真 74 「水涵」出土軒平瓦

8 (1723) 年とされており、その後火災までの約 80 年間に相当な屋根の補修があったことがうかがわれる。

棧瓦の中で中心的な文様は、中心飾が太い三葉でその両側に唐草が一転し、さらにその外側に三角形の子葉を配置するものである。同様のモチーフで 2～3 種類の范が存在するようである。

## 5. 第4次調査（平成12年度）

### T-1・2（第45～47図、写真75～79）

表御殿の西側を確認するために設定した。T-1とT-2調査区は本来個別のものであったが、接続部に溝（溝2）が検出されたことから、これを追究するために同一調査区となった。

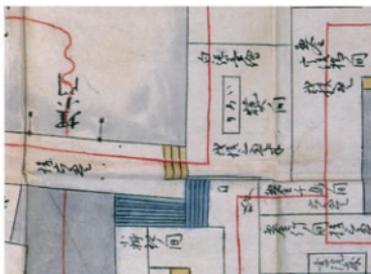
T-1は火災前の裏切手門の二階から東方方向に階段を下りた部屋「焼火之間」に相当する。調査区の中央北半部で長辺約3m、短辺約1m、深さ約30cmの長方形の掘り込み（囲炉裏1）を確認した（第45・46図）。この掘り込みの中には、炭が充填された状況が認められた。第47図には、焼火之間の中に「いろり」が記されており、本遺構と絵図との整合性が認められた。

北側小口は桜の根で攪乱されており、長辺の正確な長さは不明である。南側小口には、90cm×30cm×20cmの長方形の石が転倒した状態で出土した（第46図）。平面図は出土状態を記したが、立面図は起こした状態を紹介した。また、小口石の両側には40cm角程度の板石を敷き、壁面には板石を立て並べている。

囲炉裏1のすぐ南側に東西方向の溝（溝1）を検出した。建物の雨落溝の可能性も考えられるが、火災前後の絵図共この場所に溝の必要性はなく、暗渠になるものと考えられる。



写真75 T-1全景（南から）



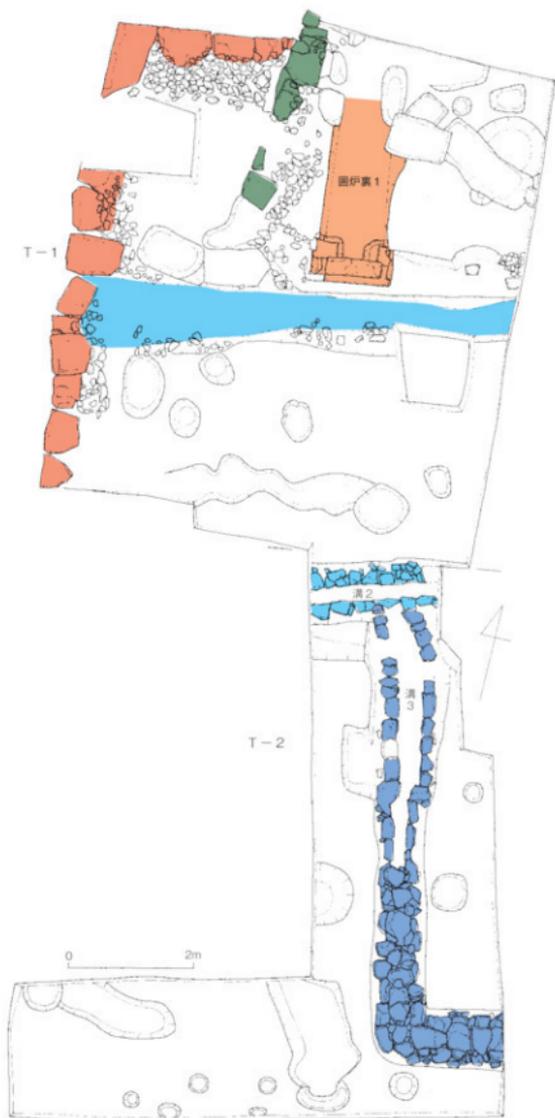
第45図 美作国津山城本丸屋形之図〔津山城資料編〕より



写真76 囲炉裏1（東から）



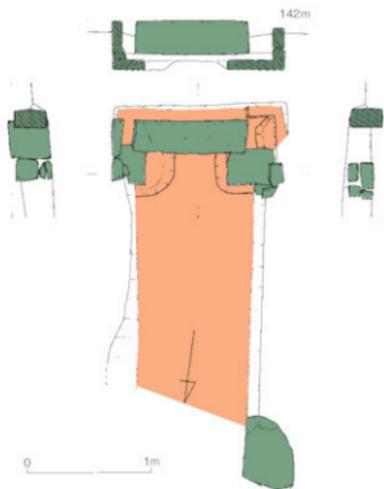
写真77 囲炉裏1（北から）



第 46 图 T-1·2 平面图 (S=1:80)

調査区の北端中央部で、北から伸びてくる石垣がそのまま南内側に約3m入り込んでいる状況が観察された。これは石垣そのものの時期差ではなく、石積における工程差であると考えたい。

T-2 調査区は、現地表面地山が露出しており、礎石等地上の遺構は既に削平されていた。調査区の東端の部分で石組溝（溝3）が東から北に折れる状況が認められた。この石組溝を追究するため調査区を北へ延長した。その結果、約7m北に延びた後、やはり石組の東西溝（溝2）に合流することが判明した。溝2はそのまま西方向へと流路を取り、七間廊下西石垣の排水溝に続いているものと考えられる。



第47図 T-1 回炉裏平面・立面図（S=1:40）



写真78 溝3（南から）



写真79 溝2・3（北から）

#### T-3（第48図、写真80～83）

広間と大書院との接続部西側及び井戸跡を確認するために設定した。絵図によると火災前の接続部は、南北3間の「金鷲之間」に相当し、その西側に井戸が隣接する。火災後は、「藤之間」の床と「桜之間」に当たる。

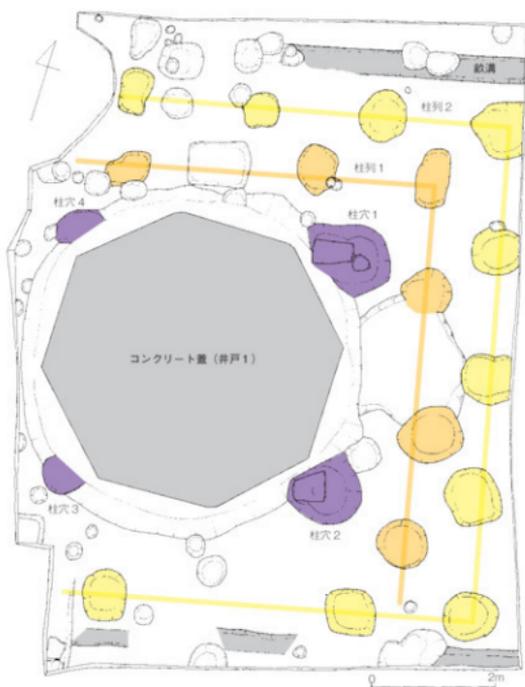
調査区中央やや西寄りに、径約6m弱の円形の掘り込みが検出された。約50cm程度掘下げたところで、



写真 80 全景 (空中写真)



写真 81 全景 (北から)



第 48 図 T-3 平面図 (S=1:80)

この掘り屑にスッポリ入るように八角形のコンクリート面が顔を覗かした。コンクリートの厚さは、約30cmを測る。井戸に蓋をしたものである。恐らく安全対策上の措置であろうが、いつ頃施工されたものかは不明である。

この井戸の掘り屑に重ねて4箇所の柱穴（柱穴1～4）が検出された。柱穴はほぼ等間隔で、正方形の角にあたる位置に配されている。柱穴1・2の底面からは、礎石と考えられる扁平な石が出土した。これらの柱穴は、井戸屋形を支えた柱位置に相当するものである。絵図によると、井戸屋形は2間×2間に描かれているが、調査では1間四方という結果が得られた。

また、井戸の周辺には、礎石の抜き取りを想定させる浅い掘り込みが多数確認された。これらは井戸を囲むように2重の「コ」の字形に連なっていることが分かる。内側のもの（柱列1）は火災前のもので、外側のもの（柱列2）は火災後のものである。

本調査区においても、北端と南端で東西方向の畑の畝溝が検出された。

#### T-4（第49図、写真84・85）

広間の西側を確認するために設定した。火災前は広間南西部にあたる。火災後の広間は、規模が縮小されていることから、本調査区からは外れている。

調査区の中央部で内法幅30cmを測る南北方向の石組溝（溝1）を検出した。北側及び南側は比較的残りが良かったが、中央部はほとんど石が抜き取られていた。溝1の半間東側に平行して柱穴が4箇所認められた（柱列1）。各柱穴間の心々距離は約1.6mで、通常の1間より短い。いずれの柱穴にも、底面に上面が平らな礎石が据えられていた。絵図との位置関係から柱列1は、

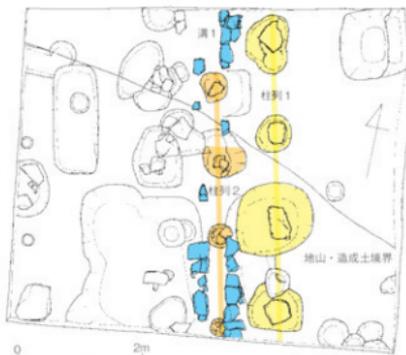
広間建物の西側ラインに相当し、溝1はその雨落ち溝になるものと考えられる。しかし、柱間隔が短いこと、御殿建築が掘立柱建物であることなどの疑問は残る。



写真82 柱穴1礎石（北から）



写真83 柱穴2礎石（南から）



第49図 T-4平面図（S=1:80）